

## 忘却にあらがう警句

国内外の情勢が揺れ動いているので、ほんの数ヶ月前の状況をつい忘れがちになる。加齢のせいもあるが、世の中の変化が激しいことによるのだろう。毎日書き続けているレポートは、過去を振り返るのに重宝している。

こうした忘却について、毎日新聞1月4日夕刊、表題の青木理「理の眼」も、昨年の重大ニュースから論じているので紹介したい。

一昨年に世を去った瀬戸内寂聴さんは、法話で幾度もこう語ったそうです。「人は忘却という能力を授かっています。忘れることで、傷ついても蘇生できる。ところが、人は忘れてはならない大切なことも忘れてしまう。こちらは仏様が与えた劫罰です」

そう、人は忘れることができるからこそ、つらい経験や記憶を乗り越えられる。その最大の触媒になるのは時間、つまりは歳月の流れでしょう。年があらたまり、暦にひとつの句点を打つ古くからの営為も、同様の作用を与えてくれるもの。でも、決して忘れてはならないこともある。

過ぎた年、最大の国際ニュースはロシアによるウクライナ侵攻であり、国内最大のそれは、元首相銃殺事件だったことに異論はないでしょう。前者はいまなお惨禍が続き、忘れられるような状況ではないものの、後者はどうか。異論や反発を遮って「国葬儀」なる追悼イベントを強行した政権は、それを「検証」と称して昨年末に賛否両論を羅列しただけの有識者ヒアリング報告書を公表。

一方で犯行の動機とされるカルト教団をめぐるのは、これも昨年末の国会で被害者救済の立法を成立させ、教団に対しては宗教法人法に基づく質問権を初行使。いずれも決して十全とはいえずとも、教団の責任追及と被害者救済はわずかに前進した形。

しかし、教団と怪しい蜜月を築き、増長させてきた政治の責任は手つかず。なぜ政治は教団と蜜月を築いたのか。その浸食深度はどれほどだったか。各種政策に教団が及ぼした影響は。政治の意向で当局捜査はゆがまなかったか。教団名変更に政治の力はうごめいていないか。世論にけおされて教団の責任追及と被害者救済に渋々手をつけた政治は、自らの責は頬かぶりし、忘却を待つ算段か。

その忘却の劫罰に話を戻せば、劇作家の木下順二さんは生前こんな台詞を書いています。「忘却のお陰で悪というものがいつまでも生きのびるってこともあるんだ」(戯曲『神と人とのあいだ』)

これは先の大戦における責任を念頭に置いた台詞ですが、劫罰の忘却にあらがうため、新年にあらためて噛みしめるべき警句でしょう。大戦の責を免れた為政者が政治と教団の蜜月の原点となり、その堆積が孫の為政者に凶弾を浴びせる結果になったことを思えば、なおさら。

(2023年1月8日)